

亜熱帯の新規増養殖対象種「メガネモチノウオ」の 種苗生産を目指して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 水産総合研究センター 公開日: 2024-06-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 町口, 裕二 メールアドレス: 所属:
URL	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2008559

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



ちゅら海便り

— 亜熱帯の新規増養殖対象種「メガネモチノウオ」の 種苗生産を目指して —

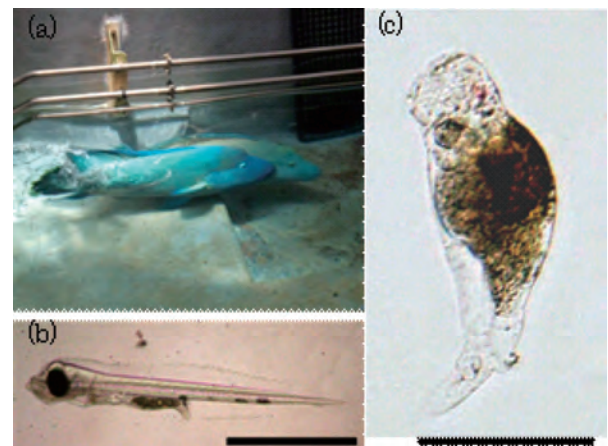
石垣支所長 町口 裕二

メガネモチノウオ（別名：ナポレオンフィッシュ）は最大で全長 2m に達するベラ科最大種で、沖縄県では「ヒロサー」と呼ばれ、水産資源として扱われています。国外では、お隣の中国でも重要な水産対象種で、非常に高値で取引されています。このため近年、東南アジア地域を中心に乱獲がすすみ、資源の減少が懸念されることから、2004 年に「絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約」(CITES：通称、ワシントン条約)の付属書 II に記載され、国際的な輸出入の管理が行われています。一方で、本種の増養殖技術開発については、インドネシアで一度稚魚生産に成功した事例を除くと成功例はなく、安定採卵に至った事例も非常に少ないのが実状です。また、天然での産卵生態や初期生活史についてもほとんど情報がなく、採卵や初期飼育における技術開発はこれまで困難を極めていました。

このような背景のなか、西海区水産研究所石垣支所においても本種の増養殖技術開発の一環として 2000 年より八重山諸島海域で捕獲した個体を用いて養成技術開発を行っています。その結果、2008 年より自然産卵によって採卵が可能になり、6 月後半から 9 月後半の水温 28-30℃ のときに、特に新月前後 1 週間に集中して産卵が行われることが明らかになりました。しかし、通常の飼育では全産卵回数の 10% 程度しか受精卵を得られず、偶発的にしか受精卵が得られないといった問題も見つかりました。さらに、ふ化仔魚は、海産魚の種苗生産で一般的に用いられているシオミズツボワムシの中でも、最小株の一つである S 型ワムシタイ株を摂餌しないことも分かり、新たな餌料を探索する必要も出てきました。

そこで 2009 年より、栽培技術研究室の平井慈恵研究員らが飼育水槽の水位低下による産卵誘発

について検討したところ、これまでに水位低下時に産卵した 21 回すべてで受精に成功し、1 回あたり平均 46 万尾のふ化仔魚を得ることに成功しました。また、ふ化仔魚の初期餌料についても 2009 年に長崎大学大学院生産科学研究科の萩原篤志教授と共同で、S 型ワムシタイ株よりもさらに小さな超小型ワムシ *Proales similis* を摂餌可能であることを発見し、2010 年には能登島栽培漁業センターとも共同で、この超小型ワムシを用いて最大 9 日齢まで飼育、成長させることに成功し、ようやく種苗生産の成功に向けての光が見えてきました。本種の天然での生態についてはまだまだ未解明ですが、このような飼育実験を通じた産卵特性や初期の食性の把握は養殖等への技術開発だけでなく、天然生態を知るツールとしても大いに期待されるところです。今後はさらに研究を進め、熱帯・亜熱帯域の水産資源の保全と持続的利用に役立てたいと考えています。



<図表の説明文>

(a)産卵行動中の親魚、(b) 超小型ワムシを摂餌した仔魚(2日齢, Bar: 1mm)、(c) 超小型ワムシ *Proales similis* (Bar: 50 μ m, 写真: 長崎大学大学院生産科学研究科 萩原篤志教授)